

新年度が始まった。

新たな出会い、新たな生活、新たな仕事。
環境の変化に苦労することもあるかもしれない。
我慢の連続でつらいこともあるかもしれない。

それでも続けることの意味は何なのか。
何かを「ずっと」続けている人を紹介します。

ずっと

ずっと この人を愛する

厚生労働省の「人口動態調査」(平成23年)によれば結婚してから5年以内の離婚は、全離婚中約35%を占めるそうだ。結婚生活を続ける秘訣は何なのか。続けてみて分かった事は何なのか。今年めでたく金婚式を迎えた池内靖さん、恭子さん夫妻に聞く。

岡田中学校で開かれた金婚式のお祝い。
白石町長から賞状と記念品を受け取る



恵久美に生まれた池内靖さん、伊予市森に生まれた恭子さん。二人は、今年結婚50年の金婚を迎えた。4月2日に行われた岡田校区金婚者表彰では、金婚者を代表して靖さんが「振り返ってみると」夫は妻に感謝をし、妻は夫に感謝していることだけは疑う余地のない確かなところ」と謝辞を述べた。お互いへの感謝を忘れない二人の、半世紀の歴史を振り返る。

出会う結婚

出合いは、少年時代にさかのぼります。親戚関係にあった二人は、正月などによく遊んでいたと言います。「カルタをしたり、おにごっこをしたり…。友達感覚だったから、女性としては見えていなかった」と苦笑いをする靖さん。恭子さんも「結婚するとは夢にも思わなかった」と話します。そんな夢が現実となったのが、昭和38年。靖さ

ん25歳、恭子さん24歳のときです。

「母がこっそり、そして抜けて目なく段取りしていて。『小さい時から知っているから、お見合いしてみない？』二人で旅行に行ってみない？ 結婚式はこの日がいい？」と。親戚同士で断りづらかったのもあり、気づいたら、プロポーズの言葉もななく結婚してしまいました」と恭子さん。「あつという間に決まっていた」と靖さんもうなずきます。

大阪での結婚生活

靖さんの仕事の転勤に伴い、大阪での新婚生活は、風呂なしの狭い文化住宅からはじまりました。恭子さんは、「今まで田舎暮らしだったから、狭くて不自由でした。1年後には長女も生まれて、家事に加えて、夜泣きが大変で…。でも主人が近所迷惑にならないように、車で長女をドライブに連れて行ってくださり助かりました」と感謝します。すると靖さんは「仕事ばかりでほとんど手伝えてなかったよ」と照れ隠しをし、「何をすることも狭くて、妻には不自由させました。だからこそ、30歳までに家を建てよう」と必死で働きました」と話します。

「特に話し合ったわけではないが、役割分担がきちんとできていた」という靖さんの言葉に、恭子さんも大きくうなずきます。このころには二女も生まれ、大阪での生活に慣れ親しんでいましたが、共に90歳を超えた靖さんの両親の面倒をみるため、愛媛に帰ってきました。

ふるさと愛媛へ

「松前に帰ってきてからあつという間に時間が過ぎました。仕事も変わったし、百姓も始めた。区長もしていたし、やることはたくさんありました」と話す靖さん。それでも、家事をしたり、両親の面倒をみたりと日々追われる恭子さんへの気遣いも忘れません。「いつも頑張ってくれているから、旅行にでもいっておいで」と言ってくれて。あまり口

には出さないけれどいたわりを感じます」とにっこり。そんな恭子さんのことを靖さんも「いつも穏やかで、笑顔でいてくれる」とつられて笑顔で話します。せっかく結婚しても、すぐに離婚してしまう夫婦が多い現在。結婚50年を迎えた靖さんは、「夫婦生活を続けていくと、いろいろと我慢することは出てくるかもしれない。でも、続けていくといつの間にか、我慢は感謝に変わってくる。あのとき頑張ってくれて、我慢

してくれてありがとうとなつてくる」と夫婦生活を継続する秘訣を話します。取材後の写真撮影で、靖さんは「50年間ありがとう。これからもよろしく」と、恭子さんは「分かっていきます。こちらこそ、ありがとう。よろしくお願います」と、お互いを見つめ合いながら、50年分の感謝と愛を込めたプロポーズをしていました。



⑤結婚式の記念撮影。この時代は家庭で結婚式を挙げるが多かった

⑥アルバムで50年分の苦楽を振り返る

池内 恭子さん(74)
(恵久美)

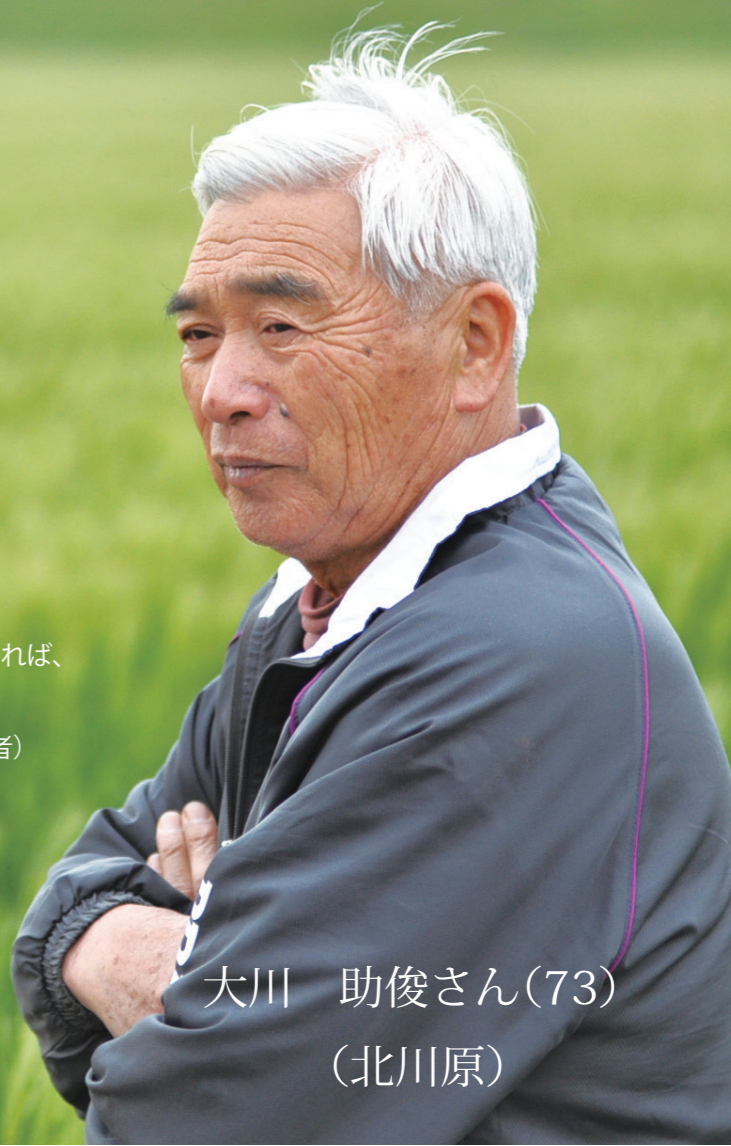


池内 靖さん(75)
(恵久美)



ずっと この仕事を 続ける

厚生労働省の「新規学校卒業就職者の在職期間別離職状況」によれば、中学、高校、大学の卒業3年以内の離職率は、それぞれ64.2%、35.7%、28.8%だという。(いずれも平成21年3月卒業者)仕事をずっと続ける秘訣は何なのか。続けてみて分かったことは何なのか。中学校卒業からずっと農業を続ける大川さんに話を聞く。



大川 助俊さん(73)
(北川原)

北川原に生まれた大川助俊さん。昭和33年に高校卒業後、実家の農業を引継ぎ、米、裸麦、野菜などを育てている。平成16年には長男の泰範さんに経営を譲り第一線を退いたが、現在も積極的に農業に携わり、岡田・松前うまい米づくり部会員としても精力的に活動。安全・安心の化学合成農薬5割減、化学合成肥料5割減のブランド米「松前育ち」を広めるなど、地域の農業活性化にも力を入れる。73歳とでも働き続ける理由を探る。

就農時の苦労

昭和33年の就農当初は、両親が大膽的に農業をやっていたこともあり、とても苦労したと言います。

「農業は、学校で習ったようには、上手くないかなかったです。だから毎日、朝から晩まで田んぼに行っていました。まさに勤め先は、田んぼ。当時、機械が少ないから、草刈りも、田植えも全て手作業。毎日力仕事で、家に帰って倒れこむ。その繰り返しでした」
精一杯働いて、たくさん米

を作り、生計を立てていた大川さん。昭和38年には、静枝さんと結婚。静枝さんに支えられることで、さらに農業にまい進しますが、時代の変化に伴い農業も変化を求められます。



重労働だった昔の稲刈り

「昔は、自給自足が多くて、現金支出はあまりなかった。でも、子どもたちが学校に上がるころには、年に1回の米、麦の収入だけでは足らなくなってきました」

昭和50年ごろは、減反政策もあり、農業者が野菜などに転作をしていた時代。大川さんも、レタスやナスを作り始めます。

「でも思ったよりも収入にならなくて…。次からし菜などの漬物野菜を始めました。出荷の為に、朝3時から、雨風関係なく働いていました」

そうした苦労は、ちょうど辛いものが流行りはじめたころもあり、安定した収入とい

う形で帰ってきます。「時代を読んでいたわけではないけれど、とにかく必死で手を打たないと、食べていけなかった。そうした気持ちが成功につながったんだと思う。苦労から逃げるでもなく、文句を言うわけでもなく、食べていくために働きました」と労働の本来の意義を熱を込めて話します。

これからの農業

少子高齢化による後継ぎ不足が深刻になっている松前町の農業。そんな状況でも大川さんは「松前町の農業は、守るんじやなくて、攻めて広がってい

きたい。松前育ちも、学校給食に使用されて少しずつ広がっている。名古屋の物産展で松前町の珍味をPRしたように、もっとPRしたい」と農業全体の活性化を意気込みます。

せっかく就職をしても「何か違う。苦労が多い」とすぐに離職してしまう人が多い現在。どうして同じ仕事を何年も

続けられるんですかと聞くと、「逆に聞きたい。『仕事をやっている人で、その仕事でないとダメ、大好きと言う人が何人いますか』と。どの仕事をやっていても嫌な事の方が多い。逃げ出さずに、そういうものと思つてやらないと。仕事はずつ

とやり続けることで、案外愛着がわいてくる。この仕事じゃないとダメってなる。定年退職をした人も、慣れ親しんだ仕事がなくなると、案外寂しがっている人も多いですよ」とこり。仕事への愛着を大いに話してくれた大川さん。定年は、まだまだ先のようにです。



学校給食に使用される松前育ち。この安全なおいしさを、この笑顔をもっと広めたい

たくさんの人が新たなスタートを切った4月。既に、つまづいている人もあるかも知れません。それでも続けていくことの大切さを池内さん夫妻や大川さんが教えてくれました。昭和30年、旧松前町・岡田村・北伊予村の合併で生まれた松前町も、単独でのまちづくりを選択し、再来年には60周年を迎えます。これからも松前ブランドのPRや防災をはじめ、たくさんの事を継続して行っていきます。たとえそこに我慢や苦労があったとしても、それでも続けていくことで、皆さんが、このまちに住んでよかったと感じ、このまちに愛着をもち、ずっと、このまちを愛せるように。

松前町が ずっと続けていること

◆郷土を美しくする清掃

6月1日(土)
9時～

(雨天時は6月15日(土))

塩屋海岸、北黒田・新立海岸ほか行政区の指定場所など

昭和45年から続いている「郷土を美しくする清掃」は、本年度で44回目を迎えます。

町内の海岸、公園、道路などにあるごみ、空き缶、雑草などを取り除く清掃活動を、本年も一斉に実施します。

「町を、ずっと、みんなで、きれいに」

皆さんの近所や事業所の周りもあわせて清掃し、私たちの町を私たちの手で美しくしましょう。



photo 昭和40年代と現在の塩屋海岸



町民課ごみ対策係 ☎ 985-4117